# コンピュータとの出会いと変化のスピード

■中林 美恵子

一個人として初めてコンピュータを購入したのは，1990 年のことだった．それまではもっぱら小さなワープロが執筆道具だったが，アメリカに渡り大学院で政治学の論文を書くうち，ワープロではとても間に合わなくなってしまったのだ．その頃学生たちの間で人気だったのが，発売されて間もない Macintosh SE/30 であった．学割を駆使して 30 万円以下で買ったように記憶している．貧乏学生としては一念発起だった．

しかし結局のところ，高性能なワープロ程度にしか使いこなせなかったのは，実に残念だった．ネットワークに接続しコンピュータ機能を十分活用するまでには及ばなかったのである．SE/30 を横目に FAX で日本に原稿を送信するありさまだった．それでも，初めて買った Macintosh には特別な愛着が残っている．十分使いこなせなかったので申し訳ないという気持ちもあったのだろう．1992 年には日本語の機能が入ったラップトップに買い替えたものの，SE/30 はしばらく自宅の机上に飾り続け，ついには青い専用ケースごと日本に持ち帰り，実は今でも埼玉県の実家の押入れに眠らせている．

アメリカ議会の職場では，1980 年代からとっくにコンピュータ化が進んでいた．私が上院予算委員会に採用が決まった 1992 年には，スタッフ同士のオフィス内連絡は完全にメールだったし，外部とのネットワーク機能もフル活用され，情報セキュリティのファイアウォールは，二重にも三重にも張り巡らされていた．リサーチのみならず，データやドキュメントの共有，複雑な計算式，グラフの作成やニュースレターの編集

■ 中林 美恵子
早稲田大学 教授

早稲田大学社会科学総合学術院・教授．元アメリカ連邦議会上院予算委員会補佐官（連邦公務員，共和党）．元衆議院議員．大阪大学博士（国際公共政策）．米ワシントン州立大学修士（政治学）．近著に『トランプ大統領とアメリカ議会』．

まで，ありとあらゆるものが簡単で手軽に扱える段階にあり，ひどく感激したものだ．

そんなアメリカ議会の職場では，次から次へとプログラムやシステム，機種のアップデートが進み，あれよあれよという間に何もかもが高性能化していった．1993 年にクリントン政権が誕生すると，ゴア副大統領による情報スーパーハイウェイ構想が注目を浴び，IT バブルのレールが敷かれた．仮想書店のアマゾンが誕生したのもこの頃である．2000 年問題という未知の課題を前に，アメリカ議会が戦々恐々としたときもあった．

その後も IT の進化は目覚ましいスピードで私たちの生活や考え方を変えようとしている．仮想通貨やソーシャルネットワーキングは，金融や政治にインパクトを与え，私たちの法整備はそれについていけていない．国際犯罪も国家の安全保障も，サイバー空間抜きには語れなくなった．

そんな時代だからこそ，IT 人材の育成は私たちの生活や国際競争力にとって死活問題だ．便利になる生活の一方で，情報テクノロジーは国家の安全にとって核兵器よりも重要な役割を担いそうだ．どの分野でも，凄まじい技術発展にこそ哲学や倫理が不可欠なことは間違いない．哲学そしてリーダーシップや倫理，歴史や世界観について，IT 人材育成にバランス良く取り入れていくことこそが，教育界に課せられた役割であると感じる．